



第 11 回 東京エリア Debian 勉強会 事前資料

Debian 勉強会会場係 上川純一*

2005 年 12 月 10 日

* Debian Project Official Developer

目次

1	Introduction To Debian 勉強会	2
1.1	講師紹介	2
1.2	事前課題紹介	2
2	Debian Weekly News trivia quiz	4
2.1	2005 年 46 号	4
2.2	2005 年 47 号	5
2.3	2005 年 48 号	6
2.4	2005 年 49 号	6
3	最近の Debian 関連のミーティング報告	8
3.1	東京エリア Debian 勉強会 10 回目報告	8
4	一年間 Debian 勉強会をやってみて	9
4.1	月例の Debian 勉強会のワークフロー	9
4.2	JDMC のような大きなイベントのワークフロー	10
4.3	勉強会の事前資料の作成	11
4.4	やった内容	13
4.5	おきたトラブル	13
4.6	できた内容	14
4.7	今後やりたいこと	14
5	次回	15

1 Introduction To Debian 勉強会

上川純一



今月の Debian 勉強会へようこそ。これから Debian のあやしい世界に入るという方も、すでにどっぷりとつかっているという方も、月に一回 Debian について語りませんか？

目的として下記の二つを考えています。

- メールではよみとれない、もしくはよみとってられないような情報を情報共有する場をつくる
- まとまっていない Debian を利用する際の情報をまとめて、ある程度の塊として出してみる

また、東京には Linux の勉強会はたくさんありますので、Debian に限定した勉強会にします。Linux の基本的な利用方法などが知りたい方は、他でがんばってください。Debian の勉強会ということで究極的には参加者全員が Debian Package をがりがりと作りながらスーパーハッカーになれるような姿を妄想しています。

Debian をこれからどうするという能動的な展開への土台としての空間を提供し、情報の共有をしたい、というのが目的です。次回は違うこと言ってるかもしれませんが、御容赦を。

1.1 講師紹介

- 上川純一 宴会の幹事です。

1.2 事前課題紹介

今回の事前課題は「Debian の 2005 年を振り返って」というタイトルで 200-800 文字程度の文章を書いてください。というものでした。その課題に対して下記の内容を提出いただきました。

1.2.1 さわださん

Debian の 2005 年を振り返ると言われたら、絶対に被るだろうけど sarge リリースか。w oody から 3 年、ほとんどのパッケージはアップグレードされている、となるとサーバが動かなくなるんじゃないかってことで sarge にアップグレードできない人って多いんじゃないのだろうか？ 実際、1.x を探している人がいるぐらいだしw。解決策としては定期的なリリースとアップグレード時の動作保証、なのだけど、いい意味でも悪い意味でも「遊びでやっている」Debian Developer の方々にリリーススケジュールや動作保証を強制するのは難しい気がする。そこらへんは ubuntu に頑張ってもらうのがいいんだろうか。

そういえば Debian GNU/kFreeBSD とか Debian GNU/Solaris とかを頑張っている人もいたな。UNIX 萌えて Debian 萌えな私としてはいろんな UNIX でさらに Debian だとうれしい。常用するかは別として。

日記を振り返ってみると白箱と書いてある。GNU/Linux でも i386 以外の選択肢と言ったところか。ボーナスが出たので購入を検討するかな。

1.2.2 上川

2005 年、debian sarge が正式にリリースされました。Debian Conference はフィンランドでいままでに無い規模のお金が動きながらも、無事に終了しました。今後継続できるのか、それが一番問題だと思います。Debian の規模は大きく、期待も大きくなっています。その一方で Debian をささえるインフラは旧来のままの部分が多いです。こ

の微妙なバランスがどうなるのか、今後目がはなせないです。

2 Debian Weekly News trivia quiz

上川純一



ところで、Debian Weekly News (DWN) は読んでいますか？Debian 界隈でおきていることについて書いている Debian Weekly News. 毎回読んでいるといろいろと分かって来ますが、一人で読んでいても、解説が少ないので、意味がわからないところもあるかも知れません。みんなで DWN を読んでみましょう。

漫然と読むだけではおもしろくないので、DWN の記事から出題した以下の質問にこたえてみてください。後で内容は解説します。

2.1 2005 年 46 号

<http://www.debian.org/News/weekly/2005/46/> にある 11 月 15 日版です。

問題 1. Debian armeb の進捗はどうか

- A やっと gcc/glibc/binutils が移植された
- B ほとんどのパッケージが移植されている
- C まだ起動もしていない

問題 2. DevJam で Java の現状について議論があった。その際の認識はどうだったか

- A まだフリーな java で全てを実装できていないので、動かないものがある
- B フリーな Java は充分利用できる状況で、それだけで全てが充足できる。
- C フリーな Java は全く利用出来ない状態

問題 3. Clam Antivirus について Marc Haber が発表したのは

- A 15 分毎に更新を確認して、あたらしくなっていたら自動で volatile.debian.net にアップロードする
- B 更新は手動で確認して、メンテナが暇なときにアップデートする。新しいデータを常に欲しい人は、頑張って自分でアップデートすること。
- C データ量が多いため、更新はしないので、各自がんばって更新してください。

問題 4. debian-installer etch beta が出ました。Joey Hess がこんなに時間がかかったことについて言明したのは

- A めんどくさかったので放置していたので、こんなに時間がかかりました
- B 10 位の項目についてそれぞれで 3 日づつ遅延要因になるため、一月くらいは遅れるはめになる
- C ちゃんとハックできる人が参加していないので、コードの品質が下がったため、こんなに時間がかかりました。

問題 5. SugarCRM は MPL1.1 をベースとしたライセンスで配布されている。そのライセンスはフリーだろうか

- A
- B
- C 改変した場合に名前を利用できないことになっているので、名前を変更すればよいだろう

問題 6. Debconf の発表資料を DFSG フリーにしようという提案について Anthony Towns がした反論は

- A ML でのスレッドなど DFSG フリーでないコンテンツは多数ある。全てがそうである必要はない。
- B ライセンスなんてつけるだけ無駄なので、つけないほうがよいでしょう。
- C あらゆるものは DFSG フリーどころか、全部 GPL であるべきなので、GPL 以外のライセンスは考えるのもおかましい。

問題 7. Gabor Gombas さんが、複数の-dev パッケージが conflict することについて苦情を出した。その対応は

- A -dev パッケージがインストールできないのは問題なので、上流のやっている内容を改変して共存できるようにするのがよい
- B openssl と gnutls をまぜるほうがライセンス的に適切なので、両方がリンクされたパッケージを作る
- C include ファイルのパスなどは開発用の API の一部であり、同じパスを利用する複数の-dev パッケージは conflict して当然だ。

問題 8. ping が Linux 専用である点についての議論で、FreeBSD や Hurd でも動作させるためにパッチを適用することに対してはどういう意見が出たか

- A 今後の Debian の一貫性を維持するためにはすべきだ
- B ping なんて BSD 上でははやらないのでなくしてもよい
- C あきらかに fork しているため、メンテナンスが大変になる

2.2 2005 年 47 号

<http://www.debian.org/News/weekly/2005/47/> にある 11 月 22 日版です。

問題 9. Matthias Klose が g++ について発表したのとは何か

- A
- B g++ のメモリアロケータが変わるため、また g++ で生成されたライブラリの ABI が変更になる。
- C

問題 10. Anthony Towns が -private メーリングリストについて提案したのは

- A 3 年たったら一般公開する
- B 存在自体を抹消する
- C 即時公開メーリングリストにする

問題 11. Branden Robinson が DPL について何ができるかという説明文を発表した。その条文はいくつあるか

- A 3
- B 10
- C 120

問題 12. Enrico Zini が発表した新しい検索エンジンでは何をもってパッケージを検索できるか

- A 2ch の過去ログ情報を用いて検索
- B debtags 情報を使って検索
- C popcon の利用頻度情報を使って検索

問題 13. Ian Jackson が提案したのは何か

- A パッケージの自動テストのためのスクリプトインタフェース
- B パッケージを受け入れるときのための基準
- C パッケージの品質をあげるための魔法

問題 14. Christopher Berg が発表した、メンテナ向けのパッケージ一覧ページの新機能でないのは

- A パッケージがどれくらい人気あるのかということを確認できる
- B パッケージがどれくらいよい品質なのかが確認できる
- C 一覧で確認できるパッケージを任意に追加できる

問題 15. PHP ライセンスについて Steve Langasek の考えは

- A PHP を使うこと自体がまず問題だ
- B PHP 自体については問題ないが、PHP 以外にそのライセンスを適用するのには問題がある
- C PHP ライセンスは本当に DFSG フリーなのかどうかはグレーだ

2.3 2005 年 48 号

<http://www.debian.org/News/weekly/2005/48/> にある 11 月 29 日版です。

問題 16. Freetype に関して何が起きる、と Steve Langasek は宣言したか

- A 誰も使っていないので、パッケージを削除する
- B ABI に変更があったので、5 のパッケージが移行する必要がある
- C ABI に変更があったので、600 のパッケージが移行する必要がある。

問題 17. sbuild の最新版はバージョンが 1.0-1 のパッケージに対しての binary NMU 番号をどうつけてくれるようになったか

- A 1.0-1+b1
- B 1.0-1.1
- C 1.0-1.0.1

問題 18. Frank Küster は、パッケージの conffile への変更の反映を管理者が拒否し、その結果 postinst が失敗になることについて、問題ないだろう、と質問した。それに対しての Petter Reinholdtsen の対応は

- A そういうエラーは管理者が拒否するのが問題なので、管理者を日勤教育するべきだ
- B そのような問題は存在しない
- C そういう場合には、設定ファイルを動作に必須なものとローカルで管理者がオーバーライドする部分とに分離することを提案する

問題 19. vservers は何をするものか

- A chroot などの技術に応用し、複数の仮想サーバコンテキストを作成してくれて、Linux 上で複数のサーバを仮想的に提供できる
- B サインは
- C サーバの統合管理のためのツール

2.4 2005 年 49 号

<http://www.debian.org/News/weekly/2005/49/> にある 12 月 6 日版です。

問題 20. Manoj Srivastava が GR の議論期間を宣言した。今回の議論は何についてか

- A -private メーリングリストの一般公開について
- B -devel メーリングリストの秘密化について
- C -mentors メーリングリストの会員制化について

問題 21. テンポラリディレクトリについての議論があり、ユーザ毎にテンポラリディレクトリを持つことがよいのではないかという結論が出た。ユーザ毎にテンポラリディレクトリを持つ際にその機能を実装してくれるのは

- A /etc/profile でテンポラリディレクトリの作成
- B init スクリプトでのディレクトリの作成
- C pam-tmpdir という PAM モジュール

問題 22. C++ のメモリアロケータの移行でまだ移行できていない、ということでさらしあげになった日本の開発者は

- A mhatta さんと土屋さん
- B gniibe さんと鵜飼さん
- C えとーさんと岩松さん

問題 23. パッケージがどのバージョン (unstable, stable, testing) 用に作成されたのかを確認する簡単な方法がないか、という質問に対しての Marc Brockschmidt の回答は何だったか

- A パッケージのバージョン番号を見ればわかる
- B パッケージの changelog を見ると、どのバージョン用にビルドしたのか、ということは確認できる。
- C Debian のパッケージはほとんど全てが一旦は unstable にあったことがあり、testing と stable に入るため、パッケージがどれ用につくられるというものではない。

3 最近の Debian 関連のミーティング報告

上川純一



3.1 東京エリア Debian 勉強会 10 回目報告

前回開催した第 10 回目の勉強会の報告をします。

今回は dpkg-statoverride と DWN の翻訳についての話を展開しました。今回の参加人数は 7 人でした。議論された点を以下に紹介します。

dpkg-statoverride で設定しても、chmod, chown を postinst で呼んでいる場合は dpkg-statoverride で指定した値はオーバーライドされてしまう。次に dpkg-statoverride がうごいた場合に直るので、インストールしてからしばらくすると直る、というような謎のバグの温床になってしまう。

無いユーザ名を指定しての statoverride は「dpkg-statoverride: non-existing user XXX」というエラーで終了しますね。

dpkg-statoverride コマンドを指定しても、どのパッケージの postinst で指定されたか、という話がわからない。

現在あまり活用されていないので問題は露見していないが、alternatives と同じで、dpkg で管理されているわけではないので、dpkg -c や -L で見えない。alternatives や diversion と併用された場合の挙動が不明。おそらくうまくいかないだろうと思われる。この点は確認が必要。

ロギングや、ユーザの作成、削除については postinst で毎回複雑な処理を追加する必要があり、難しい問題だ。トレーサビリティが無い。ただ、システム管理者側としては、知っていて損はない機構。

/usr/lib/dpkg/statoverride.d/package 名というディレクトリがあります、というような仕様のほうがよいですか？

/var/lib/dpkg/info/diversion のファイル仕様もなかなか微妙だが、/var/lib/dpkg/info/statoverride のファイル仕様は ACL や SELINUX 対応に拡張できるような形式ではない。セキュア OS 系のタグとか ACL とかも管理するために使えるような仕組みではあるのだが。

DWN 翻訳 : DWN 翻訳については、内容間違ってもユーザのシステムが壊れる、というものではないので、その点は気楽なので、よい。翻訳しにくいときに、参考リンク先の内容をみても全く同じ表現があるときには解決しなくて困る。困った時には査読の人にお問い合わせするとコメントがくるのでなんとかなることが多い。最近レビューアとして新しい人が来たのでどうなるか楽しみ。

WML をテキストにして整形するのに emacs の auto-fill で毎回処理していたり、[1] などの URL へのリンクの表現が次の行にうつらないように禁則処理をする、とかの処理を実は手動で現在している。

対訳表を作成したい。必要。難しい点としては、よくわからない用語がたくさんある。また、Debian 用語だけをとても dpkg, apt, aptitude, dselect など用語が統一されていない。curses を使っているツールだと、文字数の制限があって、「インストール」のかわりに「導入」ということばを使っていたりする。synaptic や rpm などとも用語をそれなりに統一しては行きたいのだが、訳をしている人達と、話をする機会がないのでなかなかすまない。unstable, stable, testing など「distribution」というのはちょっと違う気がする。distribution を配布版と訳するともっと違う気がする。

DWN を翻訳する作業は定期的に行われるのでそれでメンテナンスするとよいものができそうではないか？

DWN に関して、RSS と、HTML のアンカーが欲しいが、追加するのは WML のアーキテクチャとして結構難しいかもしれない。本当にこれでやっているのか、XML で処理していたりしないのだろうか？

4 一年間 Debian 勉強会をやってみて

上川



この記事の目的は、終ってからだと忘れてしまいそうだし、最中だといそがしくていっぱいなのでどこにも記録されずに忘れ去られてしまいそうな事項についてメモをしています。

希望としては、ここに書いてある内容を見て、今後のミーティングの運営をてつだってもらえるようなればよいなと思っています。

4.1 月例の Debian 勉強会のワークフロー

Debian 勉強会を毎回実施する際に利用したワークフローを紹介します。今後の勉強会などの参考にしてください。

参加者規模、10 名から 20 名程度。予算規模、宴会を含むと一回 5 万円から 10 万円程度。宴会を含まないのであれば、1 万円くらい。

4.1.1 1 年前

開催者のスケジュールの確保。人によるとはと思いますが、一年前にだいたいスケジュールを決めてしまっています。

4.1.2 2ヵ月前

会場の予約確保、開催を決断。

4.1.3 1ヵ月前

テーマの設定。講師の確保。資料の作成開始。スケジュールの対外的公表。すくなくとも一ヵ月前でないと調整はできないと思われる。

4.1.4 1 週間前

宴会の会場選定など。資料作成のデッドライン。リマインダーの送付。

4.1.5 2 日前

資料の印刷用の最終版作成

宴会の人数確定。宴会予約。

ただ、二日前に選定すると場所が限られるので、本当はもっと早い時期がよい。一般には、確定が早ければ早いほど予約は安くすむ。二日前になっても参加できるかどうかかわからないという人がいるが、そういう人の対応は難しい。店の柔軟な対応に期待するか、コストをかけるしかない。

4.1.6 1 日前

資料の印刷。Kinko's にすべてを依頼する場合は半日くらいは見込む必要がある。自分で全部するとしても量によるが、一時間は見込む必要がある。

Kinko's にすべてを依頼する場合、量が少ないとかなり割高になる。A3 の紙に A4 を面付けしてもらい、なかとじホッチキス製本にするとホッチキスだけで 150 円/冊になる。コピーが一面 14 円程度になる。

4.1.7 当日

資料をもっていく。司会をする。適当にもりあがる。

宴会も適当に。

予算は、ほぼ確実になんらかの理由でのキャンセルが発生するため、余裕を 20 % くらい確保できていないと赤字になる。

回避策としては、来ない人から徴収するとかいう案もあるが、来ない人から徴収することは暗黙に開催者が次回その来ない人から徴収する分について肩代りする、ということを意味するため、オーバーヘッドが発生することを忘れてはならない。

4.2 JDMC のような大きなイベントのワークフロー

Japan Debian Miniconf などのイベントを開催する上で重要な点は

- 連絡先を明確にする。
- 緊急時に判断をできる人を明確にする。
- 連絡網を整備する。
- ディスカッションができて、そこで決定した事項が合意したとみなせる環境をきめてしまう。たとえば IRC。

一人ではかぶりきれない責任もあるため、大きなイベントでは、本気で責任をもって開催したい、と思っている人が複数いる必要があります。

会議の内容をログに残して全員に周知させる係の人が必要。実働部隊と分けられればわけたほうがよい。JDMC では、矢吹さんだけに情報が集中していたはず。メーリングリスト上ではながれていない情報が多数あった。

また、メーリングリストで流れる情報は時系列なので、現在のステータスを一覧で把握できない。タスクトラッキングが重要になります。

また、全員がどういう方法で情報交換をするのかという点について同意が必要。メールで主要な情報交換はなされたのだが、一部の主要メンバーの人達がメールをほぼ全く読んでいなかったという問題がありました。

4.2.1 2 年前

参加者が稼働できるように日程を確保する。スポンサーにあたりをつけはじめる。マネージメント層に交渉する。

4.2.2 1 年前

スポンサーの予算が確定。講師に関しての予定、参加者の人数、プログラムの大体のイメージが決まっている必要がある。

前年度のイベントに参加して運営側で何がおきるかを明確にする。会場のサイジングなどをする。

スポンサーに関しては、事後ではなく、事前に運転資金をどう確保するのかというのも検討しておく必要がある。

また、赤字になることが見込まれるのであれば、計画を中止する。

4.2.3 6 月前

会場を確保する。宴会場を確保する。

予約システムを整備し、広報する

広報は

- マスメディアへの広報
- IRC などのくちこみ。#debian-devel@opn など
- Blog
- DWN への投稿

- メールングリスト, debian-devel@debian.or.jp, debian-users@debian.or.jp, debian-devel@lists.debian.org
- Mixi などのソーシャルネットワーク
- Slashdot へ たれこむ

GPG サインをするのなら事前に十分に準備、広報する必要がある。

4.2.4 1 月前

宴会場の確保、決定。

参加者の登録が確定しているくらい。人数が足りないのであればがんばってかきあつめるなどのアクションをとる。

ロジスティックの計画があるので、この時点での人数の把握は重要。

4.2.5 7 日前

宴会場に連絡して、大体の人数を調整。

4.2.6 2 日前

宴会場との調整、当日の人数のより確度の高い情報を提供。

4.2.7 当日

参加者の出欠確認

参加費用の集金

スポンサー企業からの提供物提供

4.2.8 事後

スポンサー企業への報告を作成。結果報告書を書き上げる。

参加者の報告をまとめてもらう。

次回への検討をはじめめる。

4.2.9 参考文献

いろいろと他のイベントの報告などもあります。参考になりそうなものを列挙します。

- Joey の LinuxTag レポート <http://www.infodrom.org/~joey/Vortraege/2005-06-24/index.html>
- Joey の LinuxTag 感謝状 <http://www.infodrom.org/~joey/log/?200512020951>
- Debconf5 Final Report <http://lists.debian.org/debian-devel-announce/2005/12/msg00001.html>

4.3 勉強会の事前資料の作成

事前資料は latex で作成しました。作業は大きく 3 種類ありました。

- クイズの作成
- 参加事前課題の作成
- 勉強会のネタの作成

4.3.1 クイズ

クイズについては、latex のマクロでクイズを作成できるようにして、それを利用して本文を作成しました。

latex のソースに下記のように記述すると、

```
\santaku{問題文}{回答 A}{回答 B}{回答 C}{回答}
```

下記のような出力ができるようになりました。

問題 24. 問題文

- A 回答 A
- B 回答 B
- C 回答 C

4.3.2 参加事前課題

メールにて参加者から plain text できたものを気合いで latex になおしました。latex で使えない文字というのがるので、それをエスケープすることと、構造文書については、構造を latex ように下記直すという手順が必要です。

例えば、下記のような文章は

```
これについて
こんなことをしてみた
あれについて
あんなことをしてみた
それについて
いっぱいしてみた
```

itemize 環境を利用して下記のような文書になります。

```
\begin{itemize}
\item{これについて} こんなことをしてみた
\item{あれについて} あんなことをしてみた
\item{それについて} いっぱいしてみた
\end{itemize}
```

- これについて こんなことをしてみた
- あれについて あんなことをしてみた
- それについて いっぱいしてみた

4.3.3 勉強会のネタ

講師の方に直接 latex で文書を書いてもらいました。CVS レポジトリは alioth.debian.org でホスティングしてもらったので、そこで共同開発者という形で参加してもらいました。

latex のスタイルはほぼそのまま jsarticle を採用しています。ただ、セクションのはじめの部分だけはこった見掛けにしようとしてしまったので、dancersection というマクロを作って独自に定義しています。各筆者は dancersection 以下に適当に subsection を作って文書を作成したらよい、ということになっています。

```
\dancersection{一年間 Debian 勉強会をやってみて}{上川}
\label{sec:uekawa}
%% 上川の記事はここから
\subsection{セクションの名前 }

文章がだらだらと続く

\subsubsection{セクションの名前 }

.
.
.

\subsection{セクションの名前 }
.
.
.
```

4.3.4 URL やメールアドレスの処理

\url{http://url...} というように表記しています。また、メールアドレスも環境を定義するのが面倒なので、そのまま \url{メール@アドレス} という形式にしています。

4.3.5 特殊文字の処理

latex でエスケープが必要な文字については下記のように対処しています。

- `~` チルダ `\~{ }`
- `_` アンダーライン `\underline{ }`

4.4 やった内容

やった内容はけっこういろいろありました。最初は一般的なうけをねらったものもありましたが、全体的には技術的な内容を主としています。

- 毎月のクイズ
- 最初の数回はグループワーク
- バックアップリストアについて
- ネットワーク監視
- reportbug の使い方
- debhelper
- Social Contract
- po-debconf
- lintian/linda
- dpkg-cross
- dsys/update-alternatives
- debian-installer
- dpatch
- toolchain
- ITP からアップロードまでの流れ
- debconf 2005 参加報告
- Debian JP web の改革
- debconf の使い方
- apt-listbugs
- debbugs
- dpkg-statoverride
- Debian Weekly News 日本語翻訳のフロー

4.5 おきたトラブル

勉強会を毎月開催する上で発生したトラブルを紹介します。かっこの中の数字はどれくらいの確率でおきたような気がしているかというのをなんとなく定量的に書いてみました。

- パソコンが盗まれる (10%)
- 家が水没する (10%)
- 病気で倒れる (20%)
- 〆切におくれる (20%)
- なぜか講師のひとと前日まで音信不通 (10%)
- 20 分くらいまえに連絡してきて、来れないという参加予定者がいる。(100%)

- 何も連絡なく来ない人がいる (100%)
- なぜか赤字 (40%)

4.6 できた内容

事前課題により事前に awareness を向上しました。いろいろと知らないことを積極的に調べることで講師がその分野に詳しくなるという副作用があります。調査して文章を書いている過程でバグが気に入らないので、バグが直る、ということを若干期待しています。

勉強会をクイズではじめてみんなで発言することにより場を和ませることができたか？と思っています。クイズは、全員に紙で配布して解いてもらわないと、順番にあてる形でやると、一部の回答している人だけが集中して、その他の人が当事者意識をもたないという問題があります (JDMC での失敗)。紙を毎回印刷するコストは大きいですが、それなりに効果もあります。

終ってからの blog へのリンク、議事録の掲載についてはあまり反響が無い。事前資料の PDF についてはいろいろと blog とかをみているとコメントがあった。

4.7 今後やりたいこと

事前の打合せをもっと密にしたい。

IRC の debianjp チャンネルで偶然いたメンバーで、なんとなく打合せはできたが、最初のころは事実上打合せは上川が電話で呼び出してどっかの飲み屋でする、とかで進んだ。後半はほとんど打合せができていなくて、前回の勉強会の後の飲み会で決定して次の勉強会にのりこむ感じだった。

事後の処理をなんとかしたい。開催した結果をもっと参加していない人にもわかるように効率よくアウトプットできないだろうか。

他の人が参加したいと思えるようなアウトプットが出せないだろうか。

来年の提案としてシステムの構築報告、動作検証、というのはどうだろうか。「この組合せはできるだろう」、という組合せに関して、関係はこうやってできる、ということを報告していけば、多くの人がその動作を確認できるようになり、問題も解決していけるだろう。Debian ユーザの勉強会というのはそういう形になるのではないだろうか。

開発に必要な情報も継続してやりたい。2 回に一回くらいはそういうユーザよりの情報の検証にあててもよいだろう。

勉強会でいいっぱなしではなく、勉強会の結果何かが起きる、というようにしたい。メンテナがバグトラッキングシステムにバグをファイルします、というように宣言するのもよいか、と考えている。

5 次回



未定です。内容は本日決定予定です。
参加者募集はまた後程。



Debian 勉強会資料

2005 年 12 月 10 日 初版第 1 刷発行

東京エリア Debian 勉強会（編集・印刷・発行）
